

ラオス派遣実習 報告書

医学部医学科1年 104150K 久田由希子

今回のラオス派遣実習にあたり、事前に ①ラオスの学生と自ら積極的に交流すること ②日本の医療、沖縄の離島の医療、ラオスの医療の相違点を感じとることという2つの目標を立て、ラオス派遣実習に臨みました。

ラオスの首都ビエンチャンは、私の事前に抱いていたイメージと異なり、とても活気のある町でした。町のいたるところに豪華な寺院があり、また僧侶も日傘をさして町を歩いていました。そのような日本では見ることのできない光景を見て、今ラオスに来ているのだと実感が沸きました。

町の中心部は、最近建てられたであろうきれいな建物が多く、道路も広々としていてきれいに整備されていました。しかし、一歩中心地を外れると、牛が放し飼いにされていたり、道路が完全には整備されず、赤土が舞っていたりしていました。佐藤先生が事前におっしゃっていた、ラオスの急激な発展の面も見る事ができました。

ラオスに到着した翌日には、大学へ表敬訪問を行い、学生との交流をして、さらに歓迎レセプションで学生との交流を深めました。

ラオスの医学生との交流では、常に英語を用いて行いました。思っていることがすぐに言葉にできないことはとてももどかしく、自分の英語力不足を強く感じました。しかし、簡単な英語で初対面の相手と意思疎通ができたことはとてもうれしかったです。



最終日には、手術を見学させていただきました。そもそも、手術を見学するのは初めてだったので、少し緊張しました。手術見学中は、4年生・6年生の先輩方に教わりながら、さまざまなことを学びました。手術を見学して感じたことは、手術というのはチームプレーで、全員の息が合って初めて成功するものだという点です。

手術前後に、患者さん本人や、そのご家族の方とお話ししたかったのですが、その時間がとれず、すこし残念でした。

今回訪問したセタティラート病院には、小さい手術室が2部屋しかなく、棚に入

っていた医療器具や医療品は少ないように感じました。しかし、待合室の様子は、日本と変わらない雰囲気でした。母親が小さい子供を抱きかかえて不安そうな表情をしている光景を見て、医療を求めている患者さんの思いは万国共通だと感じました。

まだ日本の病院見学をあまりしていないため、ラオスの病院と日本の病院の具体的な比較はできなかったのですが、この点に関しては、これからじっくり考えていこうと思います。



今回のラオス派遣実習で、本当に様々な、貴重な体験ができました。今回の体験を、今後の勉強に生かしていきたいと思います。

このような機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。

以上